館のエキスを吸収するのも一つだと思う。人がそれぞれ違うように、同じ設備をもつ図書館がどことなく違うのは、それを利用する人の想いがあるからだと想う。香川大学らしい図書館を作る一員として、このエキスを吸込みたいと思う。

知的生産の場としての大学図書館

教育学部４年
村上　秀実

この４年間、私は本当に香川大学附属図書館のお世話になった。図書館は、授業の準備やレポートの作成、期末試験の勉強の場であると同時に、新たな知識を得ることにも十分な資料を提供してくれる場であった。図書館においてあるすべての書物に目を通した訳ではないが、どのひとつをとっても、内容の深いものであると思う。そのような書物を借りたり、閲覧したりできたことに感謝している。

香川大学図書館にない本でも、他の図書館から借り出したり文献複写を依頼したりできるという便利な制度があることを最近知ったばかりである。

これから、もっと多くの人達に利用してもらうために、また、もっと充実した図書館にするために、周囲の友人達の声も含め利用者の意見を書いてみよう。

◇新刊書を早く入れてほしい。（積極的に図書の購入希望を出しましょう。）特に、新しい専門書を。

◇土曜開館は17時まで延長してほしい。日曜も開館してほしい。

◇３階の閲覧室を常に使わせてほしい。（利用者が多いので、２階だけでは狭く、雰囲気的にも自習に適当でありません。）

◇ビデオ、CDを増やしてほしい。（こちらも購入希望を出せるのですか？）

◇四国四県の新聞をおいてほしい。

◇開架図書の貸出期間をせめて２週間にしてほしい。（専門書をじっくり読むには10日では短いのです。）

◇休暇中の長期貸出はありがたい。春休みにも実施してほしい。

◇分からなくて困っているとき、職員の方に親切に教えてもらってありがたかった。

◇苦情もいろいろ聞かれたが、お互いの気持ちのいき違いもあったようだ。

図書館は、知的財産の宝庫であり、みんなが利用する公共の場でもあるから、マナーにも気を配りたい。

将来は図書館にコンピュータの端末がおかれ、キーをたたくだけで、世界中の文献を即座にディスプレイに呼び出して、読んだりコピーしたりできるようになるだろう。情報を収集すると同時に、思考しながら、知的文書を作成し、それを発信する場として大学図書館はますます活用されるに違いない。そのためにも、香川大学図書館と仲よくつき合っていきたいものである。

香川大学の貴重図書　2

弘治五年朝鮮板伊路波について

教育学部教授
柴田　昭二

弘治五年活字版朝鮮本「伊路波」（以下、本資料と略す）は、香川大学附属図書館神原文庫に所蔵される、天下の孤本である。美濃判（たて30.0cm×よこ20.6cm）、袋綴じの22葉からなる小冊子１冊で、版は銅活字版であるという。刊記に「弘治五年秋八月　日」とあって、弘治五年（1492年）の刊行である。

内容は「伊路波　四体字母各四十七字」と「伊路波　合用言語格」との二部からなり、朝鮮人のための日本語学習の教科書であることがわかる。まず第一部「伊路波　四体字母各四十七字」は日本語の文字を説明する部分で、①現行の平仮名とほぼ類似の字体（口絵および図版１参照）、②③「まな」の見出しのもとに、いわゆる変体仮名、④「かたかな」の見出しのもとに片仮名、の４種類の字体で表記した「いろは」、および「右各字母外同音三十三字類」として変体仮名、「別作十三字類」として書簡文に頻出する「御」「申」「候」など13字の漢字、からなる。このうち①および後二者には、それぞれの日本語読みが諺文で注記されている。ちなみに、諺文（おんもん　ハングル）は李氏朝鮮世宗二十八年（1446年）に朝鮮の国字として公布されたもので、四十年余にしてこの様な

（図版１）

諺文を実用に用いた書物が刊行されたことになる。

続く第二部「伊路波　合用言語格」はいわゆる候文体の書簡文集で、往復書簡二組、すなわち四通の書簡を収めた内容となっている。僅かの漢字を交えた平仮名の書簡の用例集であり、いわば「伊路波　四体字母各四十七字」が本資料の基礎編、「伊路波　合用言語格」が応用編とでもいうべきものである。「図版２」はその第三通め、すなわち二組めの往信にあたる書簡の全文である。

本資料の価値のきわめて大きいことは、その複製が三たび公刊されていることからも窺われる。

朝鮮板「伊路波」（香川大学開学十周年記念「伊路波」刊行委員　昭和34年５月）

弘治五年朝鮮板伊路波　本文・釈文・解題（京都大学国文学会　昭和40年７月）

弘治五年板伊路波　本文と索引（洛文社　昭和47年11月）

その資料としての価値については、書誌学上の位置、教科書としての意義、言語学から見た価値の三点から見ることができると思う。

書誌学上の位置とは、本資料がいわゆる朝鮮版であり、銅活字版であることによる。また朝鮮にとっては諺文公布後間もない時期の諺文の活字版であり、我が国にとっては日本語を表記した活字版として最古の資料に属するということである。

次の教科書としての意義はその内容に見ることができる。「いろは」を手習いに用いること自体珍しいものではないが、我が国ではなく朝鮮において使用されているところに意義がある。また書簡文を日本語学習の教科書に利用している点は、我が国の書簡文例集でもある「往来物」との関連において考察されるべきであろう。そしてこの内容は、日本語教科書の金字塔ともいえる捷解新語（1676年刊）や隣語大方（1790年）に引き継がれることになるのである。また一方、一世紀のちの「キリシタン資料」に先行するものとして、日本語学習の教科書としての本資料の意義は大きいといえる。

言語学から見た価値については、朝鮮語史学におけるものと、日本語史学におけるものとが考えられる。ここでは後者について、やや詳しく述べていく。古代の日本語から近代のそれへと移行する時期における、必ずしも豊富とはいえない文献資料の中で、本資料は燦然と輝くものであるといってよい。そのことは、音韻、文法、文字表記、語彙、文体の各分野にわたって指摘することができる。具体的に見ていくことにしよう。

まず「伊路波　四体字母各四十七字」（口絵および図版１参照）の諺文注記によると、タ行の五つの音節は全て同一の頭子音ｔになっている。このことは、本資料成立当時に「ち」「つ」を、チ、ツではなく、ティ、トゥと発音していたことの証拠となる。これは、古代日本語の状況と一致しており、その時代の下限を示すものと考えられる。なお一世紀のちの「キリシタン資料」では、現代の音に近いチ、ツの発音になっていることを示している。

ハ行音についても頭子音ｆおよびｐにあたる諺文注記がなされ、当時の発音が、ファ、フィ、フ、フェ、フォであったことを示している。これも上と同様の例といえる。しかし、「別作十三字類」にhaがあり、現代のハの音に変化しつつあったことを暗示しているのは、この変化の上限を示すものと考えられよう。

これらから知られるように本資料は、特にその諺文注記によって当時の日本語の音声を明確に示してくれるのである。

次に「伊路波　合用言語格」（図版２参照）の冒頭「はるのはしめの御よろこひ」については、庭訓往来（正月五日）に「春始御悦向貴方先祝申候畢」と類似の表現があり、新春の挨拶の一つの典型であったことを窺わせる。

後段の「とうれん」は「当年」と解せられる。これは「ね」と「れ」の字体の類似による誤読、誤刻とも考えられるが、一方、捷解新語で「留守居」を「ぬすい」とする例もあって、子音ｎから

子音ｒへの音訛とも考えられるのである。

「ふねう」については、天正十八年本節用集に「豊饒ブネウ　耕作好義」、また日葡辞書（1603年刊）に「Bunhôna豊富な、栄えて」とあり、辞書にある語の、実際の文章中の用例と見ることができる。

末尾「あなかしく」についてはロドリゲス日本大文典（1604年以降刊）に「男子から女子へ遣す書状では（中略）書面の終は、敬語の助辞でなくCaxicuで留め」とあり、書簡の作法としての表現であったことを窺わせる。

（図版２）

これらの例は枚挙に遑なく挙げることができ、当時の日本語の語意、語形、用法などの資料であるばかりでなく、書簡文の文体やその作法までも伝える貴重なものであるということができる。

以上見てきたように、本資料は多方面にわたって価値や意義を有するが、特に日本語の歴史を考察する上でその価値はきわめて大きなものである。今後も、とりわけ「伊路波　合用言語格」の部分において、より深い研究考察が期待される。

〈図版の注〉

（口絵および図版１）「伊路波　四体字母各四十七字」より。「いろは」四十七字と「京」以下の漢字を示し、それぞれ文字の発音を諺文で注記してある。

（図版２）「伊路波　合用言語格」より。

―釈文―

春の始めの御悦び、何時よりも目出たく申し籠め、事旧り候ぬ。さては年の内、人を参らせ、それの御事承り候べく候ところに、差し合う事多く候て、思いながらにて候。また、この春は殊更天気ものどかに、山々の花もおもしろく候えば、人多くは然るべからず候、御内の人ばかり召し具し候て御遊山もあるべく候。

何時ごろと承り候て、御迎えに御馬を参らせ候べく候。また当年は何時よりも田畠農作のたぐい目出たかるべき由、人々申候えば、世間も豊饒に候べく候。急ぎ急ぎこなたへ御入り候べく候。寄り合い申候て、所領の御訟事申合わせ候べく候。あなかしく。

国文学研究資料館データベース利用案内

参考調査係

国文学研究資料館データベースの、オンライン検索サービスが利用できるようになりました。次の三種類のデータベースが用意されています。

＊マイクロ資料目録データベース（約123,300件）

＊和古書目録データベース（約6,020件）

＊国文学論文目録データベース（昭和58年～平成元年分、約70,000件）

雑誌、紀要、および単行本論文集に掲載された論文のうち、『国文学年鑑』に収録された目録データを累積したもの。

利用については、参考調査係にお尋ね下さい。